

# 大学史ニュース

第19号

2020年7月28日 発行

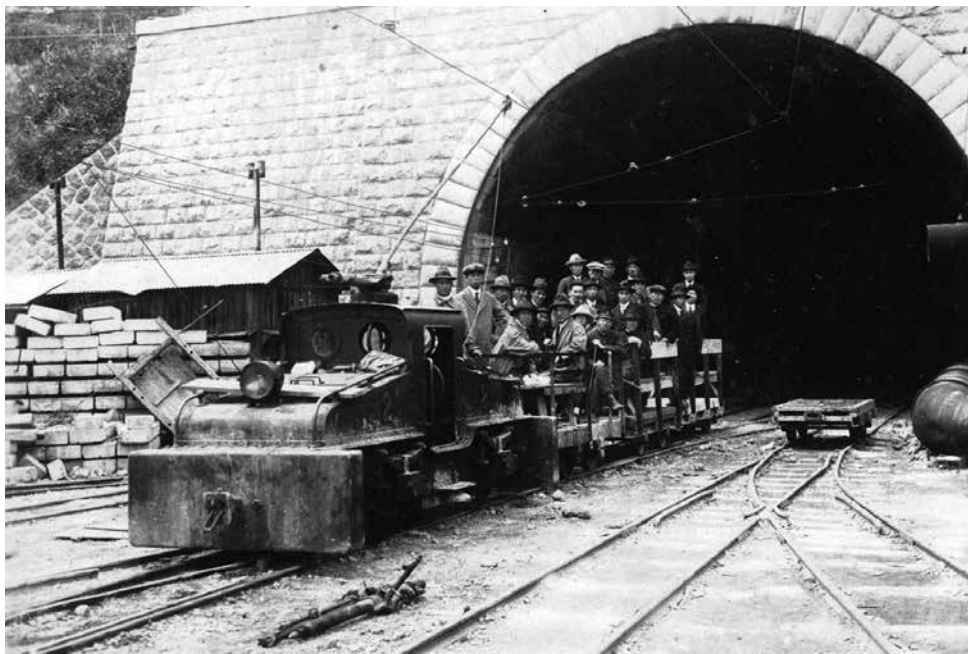
## 目次

### 資料紹介

◇日本大学高等工学校創立十周年記念絵葉書…………… 2

### 展示紹介

◇企画展「神田発信！ 大学スポーツの軌跡」  
について…………… 6



建設中の東海道線丹那隧道（トンネル）を見学

### 理工学部創設100周年

100年前の大正9（1920）年6月、理工学部の前身となる日本大学高等工学校が創設されました。同校は、働きながら学びたいと望む中等教育機関卒業生を対象とし、当時需要が増えてきた中堅技術者を、夜間2年制の教育課程で養成するための学校でした。

関東大震災が起こった大正12年は、高等工学校卒業生が世に出た時期と重なりました。その後の震災復興現場での彼らの活躍は、学部設置の呼び水となり、昭和3（1928）年4月には工学部（現理工学部）設置が認可され、予科理科を開設しました。私立の工学系学部は、早稲田大学に次いで2番目の設置でした。

ここに掲げた2葉の写真は、「日本大学工科土木科 第二回卒業記念（写真帳）」（大正12年7月）に載っている、創設間もない時期の高等工学校生の実習活動の様子です。



測量実習

## 所蔵資料紹介 日本大学高等工学校創立十周年記念絵葉書



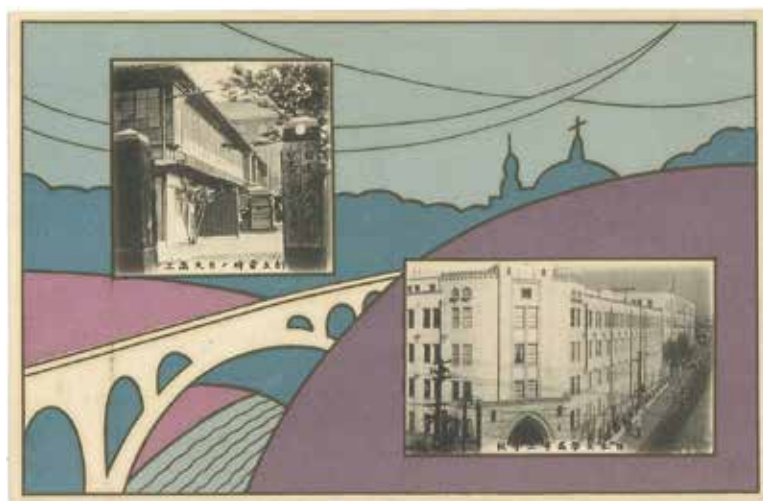
創設時からの首脳陣

前頁で紹介した日本大学高等工学校が、昭和5（1930）年に創設10周年を迎えた際に作成した絵はがきです。記念式典は同年4月に挙行されました。2年ほど前に入手した資料ですが、創設100周年のこの機会に紹介いたします。

「創立十周年」とある絵はがきには、右から、工学部（現理工学部）長兼務の佐野利器校長・茂庭忠次郎土木科長・竹村勘<sup>としかた</sup>悉機械科長・笠原敏郎建築科長・圓谷<sup>つむぎや</sup>弘学監といった、創設時からの首脳陣5名の肖像写真が並んでいます。

ただし機械科の開講は創設2年目の大正10（1921）年でした。背景は、デザイン化された「日本高工」（右から）の文字となっています。

校舎は、当初、三崎町で大学と共用していました。手狭なため、大正10年10月、駿河台に専用校舎を新築しましたが、12年の関東大震災で失いました。絵はがきは、左上が駿河台での最初の校舎です。写真の手前が専門部歯科、奥が高等工学校の校舎です。右下は工学部設置後に新築され、昭和



駿河台の新旧校舎



封紙と絵はがき3葉

4年設置の専門部工科（現工学部）・日本大学工業学校（現日本大学習志野高等学校）なども含めた、日本大学工業学園共用の本館です。背景は、デザイン化した聖橋とニコライ堂と思われます。

もう1葉には、昭和5年1月に作られた「若きエンジニアの歌（日本大学工科の歌）」の歌詞が書かれています。

（高橋）

## 三島由紀夫の転機に関わった校友—坂本一亀・小島智雄・荒木精之・伊達宗克—

今年三島由紀夫没後50年に当たり、映画「三島由紀夫VS東大全共闘50年目の真実」の放映をはじめ、関連する展示や公演などが開催されています。三島は、文壇を越えて多彩な活動を行っていたことから、その交際は広い範囲に及んでいます。ここでは、三島の転機に関わった4人の校友について紹介します。

三島は、弱冠16歳にして小説『花ざかりの森』を同人誌に発表し注目を集めました。しかし、官僚で文学嫌いの父親から、小説家になることを強く反対され、東京大学法学部卒業後は大蔵省に入省しました。しかし、小説家になることをあきらめた訳ではなく、勤務の傍ら小説を書いていた。そんな三島にチャンスを与えたのが、河出書房（現河出書房新社）の編集者坂本<sup>かずき</sup>一亀です。



昭和38年、『文藝』編集長の頃の坂本一亀  
(河出書房新社提供)

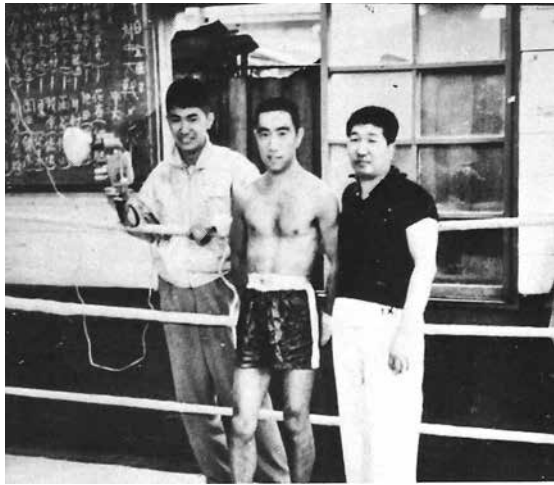
坂本は、昭和18（1943）年に日本大学法文学部文学科（国文学専攻）を繰り上げて卒業し、学徒出陣しました。復員後、河出書房に入社し、若手小説家の発掘に努めていた坂本は、三島に長編書下ろし小説の執筆を持ち掛けたのです。三島は快諾し、「俺は今度の長編に賭ける」と言って大蔵省を辞職しました。そして、書き上げたのが昭和24年に刊行された『仮面の告白』でした。三島は、この作品により文壇での地位を築きました。坂本は、三島以外にも、野間宏、椎名鱗三、島尾敏雄、高橋和巳など、戦後文学を代表する多くの小説家を世に送り出しています。なかでも坂本が情熱を注いだのは、若手新人の発掘でした。河出が発行する『文藝』の編集長に就任すると、寸暇を惜しんで、『同人雑誌』を読み、毎月「文藝」の会（新人執筆者の懇談会）を開催しました。時には厳しく意見し、何回でも書き直させて、彼らの潜在能力を引き出しました。このように坂本が次代を担う若者に情熱を傾けた理由には、同世代の仲間を失った戦争体験があったからと言われています。世界的ミュージシャンとして知られる坂本龍一氏は、一亀の長男です。

三島は、『仮面の告白』以後も話題作を次々と発表し、若くして流行作家の地位を不動のものにしました。しかし、少年時代から虚弱な体質にコンプレックスを持っていました。そんな三島が、昭和30（1955）年に始めたのがボディビルです。これによって肉体的自信を得た三島は、翌31年にはボクシングに意欲を示しました。東京大学在学中に初めてボクシングを観戦し、神聖でロマン的なスポーツであると、憧れを感じていました。ボクシングを指導することになったのが、当時日本大学ボクシング部監督の小島智雄です。

小島は、昭和15年に日本大学商経学部経済学科を卒業し、現役時代はボクシング部の主将を務めています。日本大学ボクシング部は伝統ある強豪チームで、当時も「全日本大学ボクシング王座決定戦」で3連覇を遂げていました。ボクシングは、すぐれた運動神経と反射神経、並はずれた体力を必要とします。30歳を過ぎて初めてボクシングを始める三島に対し、小島は、「決して試合に出たがらぬこと」を条件に指導を引き受けたといいます。それは、怪我をしないようにとの気遣いと、もし怪我でもされれば、ボクシングが危険なスポーツと誤解されることを恐れたためです。

三島は、週に2回下目黒のボクシング部合宿所に勇んで通い、縄跳び、サンドバッグ叩き、シャドウ・ボクシングなどの基本的なトレーニングを繰り返しました。3ヵ月後、初めて小島とのスパーリング（ヘッドギアとグローブを付け、3分間ずつ試合形式で行う練習）を許されましたが、たった1ラウンドでへばってしまいました。2度目のスパーリングも2ラウンドがやっとで、三島は「3分間という時間が、10年ぐらいの長さを感じた」と述べ





日大ボクシング部合宿所にて、左から石原慎太郎、三島由紀夫、小島智雄  
(『新潮日本文学アルバム20三島由紀夫』より)

ています。三島の「哀れな姿」(三島自身の言葉)を、石原慎太郎が16ミリシネマで撮影しています。スパーリングによって、ボクシングが過酷なスポーツであることを思い知った三島は、9ヵ月余りでボクシングを止めました。しかし、ボクシングを体験できたことに満足し、小島とは、石橋広次(小島門下の全日本バンタム級チャンピオン)の試合をいっしょに応援に行くなど、交流を持ち続けています。

昭和30年代中頃から、三島は、日本や日本文化への危機感を持ち、国家・民族・天皇への関心を高め、『憂国』(昭和36年)『英霊の聲』(昭和41年)などを刊行しています。昭和41(1966)年8月末、『豊饒の海』第2部『奔馬』執筆の取材のため熊本に行きました。この時、学習院時代の恩師清水文雄の紹介により、訪ねたのが作家荒木精之<sup>せいし</sup>です。

荒木は熊本に生まれ、苦学しながら昭和9年日本大学法文学部文学科(史学専攻)を卒業しました。在学中から小説家を志し、石川達三、中山義秀らと交流しています。卒業後熊本に戻り、教員をしながら小説の執筆や歴史の研究を続けました。なかでも、忘れられていた神風連について熱心に資料を調査し、関係者123人の墓所についても確認しました。昭和53年には神風連資料館を桜山神社境内に設置しました。また、文化総合雑誌『日本談義』を長く主宰し、熊本県文化懇談会、熊本県文化協会を結成するなど、熊本の文化振興に多大な功績を残しています。

荒木は、それまで三島にはほとんど関心を持っていませんでしたが、会って話をしてみると、神風連に対する敬虔な態度と知識の深さに驚いたといいます。一方、三島は、神風連関係の遺蹟を回り、荒木の話を通じて聞き、「はじめて日本人としての自分の故郷を発見した。また神風連は小生の精神史の一つの変革をもたらした」と述べ、『奔馬』の主人公の精神的支柱を神風連としています。

昭和45(1970)年11月25日、三島は、憲法改正や自衛隊の国軍化を訴え、楯の会隊員4人とともに、陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地内の東部方面総監室を占拠し自決するという、「三島由紀夫事件」を起こしました。三島は決起が失敗した場合、その「真意」を伝えてもらうため、事件当日、「檄文」(声明文)などを、ジャーナリスト2人に託しています。その内の1人がNHKの放送記者伊達宗克です。伊達は、宇和島藩伊達氏の出自で、昭和28年に日本大学法学部新聞学科を卒業しました。卒業後は、東京日日新聞社(現毎日新聞社)に入社し、翌年にNHKに移り放送記者となりました。三島との出会いは、昭和41年、三島の作品『宴のあと』のプライバシー訴訟を取材した時でした。その後、ノーベル賞の有力候補になった時、自衛隊への体験入隊、楯の会のパレードなどを取材し、次第に三島と懇意になりました。

伊達は事件前日の24日夕方、三島から「明日、話しがあるので、あるところに来て欲しい、時間と場所は明朝



昭和16~17年頃 神風連志士の墓を探す荒木精之  
(『近代への反逆』より)



伊達宗克著  
『裁判記録「三島由紀夫事件」』講談社

連絡する」との電話を受けました。翌日、「11時に市ヶ谷会館に来て欲しい、楯の会隊員が案内する」という電話があり、そこに行くと、楯の会隊員から、「檄文」、「三島と同志の写真」、「伊達宛私信」の入った封筒を手渡されました。私信には、「傍目には狂気の沙汰に見えようとも、小生らとしては、純粋に憂国の情に出たるものであること」「願うは小生らの真意が正しく世間に伝わることにある」と書かれていました。このようにして、伊達は「三島事件」を直接目撃することになったのです。当時、伊達はNHKの司法キャップであったことから、三島事件について被告の取り調べ、起訴、公判の取材のすべてを担当しました。そこで、三島らの「真意」をありのままに後世に残すために、公判の結審後、『裁判記録「三島由紀夫事件」』を刊行しました。

(小松)

【主な参考文献】

田邊園子『伝説の編集者坂本一亀とその時代』（作品社 2003年、河出文庫2018年）、山内由紀人『三島由紀夫の肉体』（河出書房新社、2014年）、荒木精之『近代への反逆』（荒木精之著作集、熊本出版文化会館、1992年）、伊達宗克「三島由紀夫事件の体験」（同『放送記者』、りくえつ、1980年）

## 日本大学出身の海軍技術官・補足

平成20（2008）年に刊行した『覺誌』第4号掲載の「海軍技術官と高等教育機関（日本大学と陸海軍④）」では、理工系高等教育機関を海軍技術官の採用源としての視点から取り上げました。その中で、土木・建築関係の技術官に関しては、日本大学出身者として、昭和17（1942）年9月以降に採用され、見習尉官を経て施設系技術科士官となった59名を含む、文武官90名の氏名が明らかになりました。しかし、帝国大学を中心に官立出身者が多数を占めていた造船官・造機官・造兵官に関しては、ひとりも判明しませんでした。

以降、新たな情報を得ていませんでしたが、平成31（2019）年3月に刊行された沢井実『海軍技術者の戦後史』（南山大学学術叢書）（名古屋大学出版会）の「付表1-1（6）元海軍造船技術者の戦後」及び「付表2-1（3）元海軍技術科（造機）士官の戦後」に日本大学出身者3名の氏名があり、日本大学校友会名簿で確認されたので、ここに補足として掲載します。

### 日本大学工学系教育機関出身の海軍技術官

R02.06.30 現在 追加者

氏名	部科*	卒業年*	海軍での身分	戦後*	備考
両角 五郎	工学部電気工学科	2回生:昭和 9年3月	技師・高等官七等**	自営(船渠関係業務)	終戦時:佐世保鎮守府附
岩下 登	専門部工科機械科	10回生:昭和16年3月	技術科士官(造機)	自動車製造会社勤務	任官:昭和16年
中川 一徳	工学部機械工学科	12回生:昭和18年9月	技術科士官(造機)	造船会社勤務	任官:昭和18年

\* 『日本大学校友会 年度別会員名簿 昭和三十三年』『日本大学校友会 業種別会員名簿 昭和三十六年版』による。

\*\* 技師は高等文官、高等官七等は武官では中尉相当官。

(高橋)

## 企画展「神田発信！ 大学スポーツの軌跡」について



神田発信！ 大学スポーツの軌跡  
(明治大学博物館特別展示室)

令和2（2020）年1月24日から、明治大学博物館特別展示室および明治大学中央図書館ギャラリーで上記の企画展が開催されました。これは、草創期から神田に所在していた専修大学、中央大学、日本大学、明治大学の大学史関連部署が合同で開催した企画展です。会期は4月12日までの予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、会期中途から会場が休館となり、そのまま展示が終了いたしました。

今回は、この企画展の内容について、本学出展資料を中心に紹介していきます。

明治大学博物館特別展示室では、明治期から現在までの大学スポーツのあゆみについて展示しました。はじめ

に、「近代スポーツのはじまりと学生」と題して明治期の学生スポーツ活動を紹介しました。専修学校、明治法律学校、英吉利法律学校では、明治10～20年代頃から運動会を開催しており、その関連資料が展示されました。

本学の前身である日本法律学校の時期には、スポーツ活動はあまり活発ではありませんでした。明治36（1903）年に日本大学と改称し、翌年、専門学校令による日本大学の認可を受けましたが、この頃から学内におけるスポーツ活動が始まります。明治38年に運動会規則を定め、水上・陸上の運動部を設置しますが、とくに水上の端艇競争は明治～大正期に学内スポーツとして盛んに実施されました。今回は、端艇部が発注した端艇進水式の記事、明治40年に隅田川で開催された「日本大学第二回水上運動会」で優勝した法科選手の写真パネルを展示しました。

次に「大学スポーツの組織化と飛躍」として、明治末から戦前期までを取り上げました。日本は明治45（1912）年の第5回ストックホルムオリンピックから選手を派遣しましたが、このとき参加した金栗四三と三島弥彦はともに学生でした。その後、大学間の対抗戦、交流戦も活発化し、日本の大学スポーツのレベルが飛躍的に向上していきます。



第二回日本大学水上運動会優勝の法科選手  
(明治40年)

この時期の本学

関係資料として、本学の遊佐、葉室が水泳で金メダルを獲得したベルリンオリンピック関係資料、昭和10年代の本学競技部写真、卓球部関係資料などを展示しました。また、専修大学が所蔵する東都野球連盟の前身となる五大学野球連盟発足時の写真が展示されましたが、その中には昭和6（1931）年当時の本学野球部の写真が含まれていました。

次に「精華を競う一体育会の活躍」として、戦後から現在までの大学スポーツ資料を紹介しました。この時期の本学関係資料としては、古橋廣之進関係資料を展示しました。敗戦後の日本は国際的なスポーツ大会への参加が禁止されていて、昭和23（1948）年のロンドンオリンピックも参加でき



ベルリンオリンピック出場の日本大学選手  
(右から柴原、葉室、遊佐、鈴木、奈良岡)



ませんでした。昭和24年6月、日本が国際水泳連盟復帰後、最初の国際大会となる全米水上選手権に古橋ら日本選手6名（うち4名が本学選手）が出場、古橋は400m、800m、1500m自由形を世界新記録で優勝し、アメリカでは「フジヤマのトビウオ」と称されました。今回は、この全米水上選手権の写真、公式プログラム、記録証明書などのほか、全米水上選手権の翌年、北九州にアメリカ選手を招待して開催した日米水泳大会のプログラム、ヘルシンキオリンピックの時の古橋への応援電報などを展示しました。

壁面には「神田・大学スポーツの現在」として、各大学の体育会・競技部の写真をパネルで紹介し、その下の展示ケースには、各大学のオリンピック関係資料を展示しました。

明治大学中央図書館ギャラリーでは、「神田の大学と箱根駅伝」と題して、箱根駅伝に関する企画展を開催しました。今回、共同で開催した専修大学、中央大学、日本大学、明治大学の箱根駅伝総合優勝は、昭和43年までは44大会中32回と圧倒的で、神田の大学が覇を競っていました。



全米水上選手権プログラム  
(昭和24年)

今回は4大学共同での大学スポーツ展となりました。本学だけではなく、神田の大学のスポーツの歩みとして展示することで、日本の大学スポーツ、近代スポーツの変遷がみえたかと思います。今後も各大学史関連部署が各々の大学史資料の調査、研究を深化させ、その蓄積を持ち寄ることで、時代の特徴が浮かび上がるような企画展を開催できればと思います。本企画展にご協力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。

(松原)



東都野球リーグ発足時の日本大学チーム  
(昭和6年 専修大学蔵)

本学から出展した資料をいくつか紹介します。水田信道元監督より寄贈された、丸三郎初代駅伝監督が使用していた木製メガホンは、歴史の重みを感じる資料でした（資料の詳細は本誌18号参照）。また、日本大学陸上競技部所蔵の箱根駅伝2代目優勝旗「勝鬨」も同競技部の協力を得て展示しました。この優勝旗は、戦前最後の駅伝である昭和18（1943）年の大会で優勝した際に獲得したものです。戦時体制下で昭和16年より中止されていた箱根駅伝は、昭和18年、靖国神社と箱根神社を往復して戦勝祈願をするという趣旨で開催されました。今回の企画展では、この大会に本学から出場した永野常平氏の写真アルバム・駅伝参加章、成田静司氏の駅伝当日の日記（パネル）なども併せて展示いたしました。

なお、会期中で展示室を閉鎖したこともあり、日本大学会館2階で本学出展資料の一部を5月より8月末まで展示しています。日本大学会館にお立ち寄りの際はご覧ください。



神田の大学と箱根駅伝  
(明治大学中央図書館ギャラリー)

※令和元年12月、事務室が所沢から市ヶ谷に移転しました。

(移転先) 〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24 日本大学会館8階  
日本大学企画広報部広報課(大学史編纂) E-mail: nuhistory@nihon-u.ac.jp  
TEL 03-5275-8444 FAX 03-5275-8094

母校に関する資料が皆さんのそばに眠っていませんか

資料・情報提供のお願い

広報課(大学史編纂)では「日本大学史」に関する資料を広く収集しています。本学の歴史・学生生活・校友の足跡等のようなことでも結構ですので、お気軽にご連絡ください。

## 活動報告

令和2年1月～令和2年6月  
(大学史に関する活動)

○調査研究等

2月26日 武蔵俊英学寮保管文書の調査

○展示

1月24日～4月12日 「神田発信!大学スポーツの軌跡」(明治大学博物館特別展示室及び明治大学中央図書館ギャラリー)  
途中から臨時休館  
2月5日～5月7日 「版画に見る山田顕義」(日本大学会館2階)  
5月8日～8月末日 「日本大学のスポーツ活動」(日本大学会館2階)

○講演・報告

4月 理工学部 大学史講演(パワーポイント及び原稿を作成)  
6月 スポーツ科学部 自校史講演(動画にて実施)  
6月 危機管理学部 自校史講演(動画にて実施)

## 日本大学大学史ニュース 第19号

2020年7月28日 発行

編集・発行 日本大学企画広報部広報課  
〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24  
TEL 03-5275-8444 FAX 03-5275-8094

印刷 株式会社 日本大学事業部